

スコットランドの諺とジョーク

奥 津 文 夫

はじめに：

去る 9 月 18 日にスコットランドの英国からの独立を問う住民投票が世界の注目の中で実施され、結果的には経済の安定を重視したとみられる住民が半数を上回って否決されたが、独立を強く望むスコットランド人が相当多数いることが改めて証明された。

スコットランドがイングランドと合邦したのは 18 世紀初頭であるが、スコットランド人はケルト系でありアングロサクソン系のイングランド人とは歴史と民族や文化の違いがあり、スコットランド人は常に独立を意識してきたと思われる。スコットランドは北海道ほどの面積でイングランドと比べると人口は 10 分の 1 の 530 万人であるが、自立心の強い誇り高き民族である。Dr.Johnson の英語辞典の中の“oat”の定義は有名であるが、スコットランドのジョーク集にも次のような例が出ておりスコットランド人の自負心とユーモアが表れている。

Englishman: In Scotland, the men eat oatmeal; here in England we feed it to our horses.

Scotsman: That's why English horses and Scottish men are the finest in the world!

私は 1990 年にエジンバラ大学に客員研究員として在職し、スコットランドの諺と背景文化について研究調査した。杉本豊久氏もかつてスコット

ランドのグラスゴー大学に留学されたこともあり、また杉本氏はジョークが得意な快活な性格の先生でもあるので、今回はスコットランドの諺とジョークを主たる題材としてスコットランド人の国民性とユーモアについて書いてみたいと思う。

1. イングランドとスコットランド：We will not lose a Scot.

キャメロン首相はスコットランドが独立すると英国政府にとって国家体制上でも経済面からも痛手であるので、独立を painful divorce に例えて、Let's stick together. (一緒に頑張っていこう) と呼びかけて独立を断念するよう強く説得してきた。標題に掲げた英文 We will not lose a Scot. (我々はスコットランド人一人でも失いたくない) は英語の諺であり、正にキャメロン首相の気持を述べたもののように思われるが、皮肉にもこの諺は全く異なる趣旨のものなのである。これは17世紀にできた諺で「どんなつまらないものでも失わずに済ませられるなら失いたくない」という意味であり、イングランド人がスコットランド人に対して敬意も親しみも有しなかった時代に生まれた言葉なのである。

このようにイングランド人はスコットランド人を見下してきた歴史がある。次のような英国作家の言葉もある。

It requires a surgical operation to get a joke well into a Scotch understanding.
(Sydney Smith)

I have been trying all my life to like Scotchmen, and am obliged to desist from the experiment in despair. (Charles Lamb)

またスコットランドを訪れたいと言った女性に対して Dr. Johnson が言ったと伝えられる次のような言葉もある。

Seeing Scotland, Madam, is only seeing a worse England.

2. スコットランドの諺

私はエジンバラに滞在中にスコットランドの諺を数冊出版している一人の著者のお宅を訪れて諺について色々と話をすることができた。その方はマグレガー (Forbes Macgregor) という名前の元小学校長で、諺を 40 年以上も研究している 80 歳を越えた老先生であった。氏によると、昔のスコットランド人は、口を開けば諺が飛び出すほど諺好きであったが、現代では諺を愛好する人達が少なくなり、特に若い人達はスコットランドよりイングランドの諺や言葉を好む傾向があり嘆かわしいとの話であった。

スコットランドの諺にはイングランドや英国全土で使われている諺と共通するものが多いのも事実であるが、勿論スコットランド固有のものもある。例えば次のような諺はスコットランド人の気質をよく表すものだと言われている。

Gie your tongue mair holidays than your heid.

(Gie = Give, mair = more, heid = head) Think before you speak. の意。

The lass that has mony wooers aften wails the worst.

(mony = many, wooers = lovers, aften = often, wails = chooses)

Ne'er marry a widow unless her first husband was hanged.

この最後の諺の意味は、再婚した女は夫を前の夫と比較して文句を言ったり、先夫を懐かしんだりするが、先夫が絞首刑になったような悪い男だったら、そういうこともないということである。スコットランドでは昔は羊を盗んでも絞首刑にされたのである。

また次のような、いかにもスコットランドらしい諺もある。

Macgregor as the rock

Macdonald as the heather.

この諺は「マクドナルド家はマグレガー家に比べると新参者だ」という

意味である。ヘザー (heather) というのは英国の荒野に群生するツツジ科の常緑低木であり、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』などにはヒース (heath) の花に一面覆われた原野が描かれているが、実際の heath と heather の区別はやや曖昧である。私が当地を旅行中に観光バスの運転手にたずねたら「heath はツツジ科の低木のことで、heather はその種の木に咲く花のことで、前者は男の名前で、後者は女の名前だ」と説明してくれた。確かに heather はスコットランドでは女性の名前によく使われている。8月の末に高地地方を旅行するとピンク色の heather の花が荒野一面に咲き乱れて実に美しい。そしてこの苗木を所々で観光客に売っている。『ロングマン英和辞典』(PEASON/ 桐原書店、2006) の中の heather の項には次のような解説がある。

「人々は heather という語から、秋になると山腹が紫色に染まるスコットランドを連想する。白いヘザーは幸運を呼ぶとされ、ジブシーが売り歩くこともある。」

3. 共通の趣旨の諺

既述の通り、イングランドとスコットランドでほぼ同じ表現で同じ趣旨の諺も沢山あるが、趣旨は同じだが、いかにもスコットランドらしい諺をいくつか挙げてみよう。まず heather を使った次のようなものがある。

It's bare muir that ye gang throu and no find a heather cow.

(muir = moor, gang = go, cow = tuft, bush)

→ It's a long lane that has no turning. 「待てば海路の日和あり」

To set the heather on fire.

→ To set the Thames on fire. 「(世間をあっという間に驚かせるようなことをして) 大成功する、名声を博する」

その他次のように、たとえに使う生物などが異なるものも多い。

Auld sparrows are ill to tame.

(auld = old) → An old dog will learn no new tricks.

「古い木は曲がらぬ」

An ill shearer ne'er got a guid heuk.

(guid = good, heuk = reaping-hook)

→ A bad workman always blames his tools. 「下手の道具調べ」

なお、英語の諺に Fair maidens wear no purse. というものがあり、スコットランドにも全く同じ Fair maidens wear nae purses. というものがあるが、この諺についてマグレガー氏の著書には次のような解説がついていて興味深い。miser と言われるスコットランドの男達もやはり美人には弱いようである。

Despite the reputation of the Scots for meanness, this proverb was in common usage among them when a girl offered to pay her expenses in mixed company.

4. スコットランドのジョーク

前項の最後に挙げた諺に関する解説にもある通り、スコットランド人は mean, stingy (けち) だという reputation があり、次のようなジョークはよく知られている。

「スコットランド人の時計は電池が外してある。

——外しても一日に2回は正しい時刻を指すから」

「スコットランド人はみな結婚式は2月29日に挙げたいと思っている。

——結婚プレゼントが4年に1回で済むから」

「スコットランド人はコンドームもクリーニングに出す」

「スコットランドのある葬儀社が、創業祭で今なら棺桶が半額、という

広告を出したら、その日の夕刊に、50 人の自殺者が報告された」

「スコットランドのバスはすべて前払いである。もし後払いのバスがあったら、乗客全員が終点まで行ってしまう。なぜならスコットランド人はお金を出すことが一番嫌いだから降りられなくなってしまうから」

(実際エジンバラでもバスはみな前払いであった)

スコットランド人自身もけちであることを認めている感もあり、エジンバラにも彼ら自身が編集したけちを題材にした本が沢山並んでいた。当地で購入したジョーク集の中からいくつかの面白い例を挙げてみたい。

* Scottish preacher to his congregation: “I don’t mind your putting buttons in the collection plate, but please provide your own buttons and don’t put them off the church cushions.”

* It is now not generally believed that golf originated in Scotland. No Scotsman would invent a game in which it was possible to lose a ball.

* Why are Scotsmen so good at golf? — They realize that the fewer times they hit the ball the longer it will last.

* Sign in a Scottish garage: The man who lends tools is out.

* How do you recognize a left-handed Scotsman? — He keeps all his money in his right-hand pocket.

おわりに：

スコットランドの人々は質素な生活をしている。若い女性には美人が多いが、ブランド品を追い求める日本の女性達とは異なり、彼女達は古着屋で洋服を買い、雨の日には骨の折れた傘をさして颯爽と歩いている。また床屋や魚屋などでも明るく伸びやかに働いている。スコットランド人は貧しくとも日本人よりも心豊かに悠然と生きているように思われた。独立の

夢は破れたが、誇り高きスコットランド人の未来に栄光あれと祈りたい。